

コミュニケーション演出の可能性

齋 藤 貴 子

The View of Future Communication and its Production

by

Takako Saitō

はじめに

これまで人類が体験したことがないような大きな波に洗われている現代、私達は氾濫する情報の渦の中で、周囲の生活形態の急激な多様化に戸惑い、ともすれば己れの存在する足場を見失ってしまいそうになる。現実の状況は、従来の価値がいたる処で否定され、さりとて明るい未来も期待できない混迷の様相を帯びているように見える。だが、耳をそばだてれば、新しい時代は音をたてて、近くまで迫っていることを感じる。

世界は今や、コンピューターに代表される多くのマス・メディアの活躍によって、地域性や民族性といった古い枠を越えて、全地球的規模の共同体形成へと流動している。情報や物質の全地球的拡散は、精神界にも大きな変動を起しており、科学や芸術、宗教の分野においてさえ従来の原理・方法の根本的見直しが始まっている。

神秘主義者、ヨアキム・ディ・フィオレは、意識の発達史で第3の時代に当る現代は、中世のような恩寵と教化ではなく、1人1人が自分の内部に眼に見えない祭壇を作る——必要な行動の指針を出す——時代、つまり愛と自由とが支配する時代と考えたようです。

こうしてみると、現代ほど、1人1人が自の責任において自己に忠実に生きられる時代はなかったようである。

ところで、従来重要な価値をもっていたものが新しい価値にその座を奪われるという逆転劇が多くの分野に急速に広がっている。

マス・メディアの発達によって、あらゆる領域間——例えば、西洋医学と東洋医術、資本主義国家と社会主義国家、男と女、地球と宇宙全体、宇宙工学と超心理学などの交流がダイナミックに創造的に展開されているが、そこに生じているのは対立と闘いではなく、矛盾の融合と創造、閉鎖から解放への動きである。

さて、いつの世でも教育はその時代の新しい潮流を先どりし、その社会が要請する人間の「生」の課題克服の使命を担ってきているが、今の教育に要請されていることも、時代の潮流を先どりし、これからの時代に生きる人間の「生」の創造に参画することである。

それゆえ、現在拡がりつつある異質な領域間の全地球的、全宇宙的融合と創造のダッシュが宇宙の中でも特に創造の可能性を秘めた素材としての人間1人1人の中に結実していくほど、人間も宇宙も混迷から新しい秩序の世界へ、閉鎖から解放へ、対立から平和へ、画一から個性化へと急速に移行するであろうし、教育がその移行での重要な立役者であることを自覚することの必要

性は、以前よりさらに強まっていると言える。

そういうものとして教育が意識されてとり組まれるほど、それは思想や感覚、言葉や意匠、形態や色彩、身振りや所作、メロディ、技術や知識、その他あらゆる有機と無機を総合して全体の生命を燃え上らせるような芸術的な内容を帯びてくる。それはいわば演劇における「演出」の仕事にも似ている。教師は、脚本家であり演出家でもある。時には役者そのものであり、観客の役を演ずることもある。

一方、観客であり、役者である生徒は、教師の演出次第で、その人間としての能力の開花が大きく左右されてくる。

本研究では、新しい時代に生きる人間への変革の可能性と、その方向を「演出」という側面から考察したものである。

1. “たくらむ”人間たちの増加

「心の変革をなしとげた個人があちこちに生まれ、互いに知り合うことがなくとも目に見えない連帯となって拡がり、やがて世の中全体を変革していく」という衝撃的な発言をマリリン・ファーガソン女史はその著『アクエリアン革命』で行なっている。

“アクエリアス (Aquarius)” は、占星術でいう「水瓶座」のことである。闇と暴力と混沌に満ちた世界ではなしに、透き通った愛と光にあふれた、精神が解放された世界—水瓶座の人間のもつ世界—に生きる人々が1980年代のアメリカに増え、アメリカを根底から変えつつあるという。彼女のことに少し耳を傾けてみよう。

「その集団にはカリスマ的指導者はいないが、なにか大きな力が潜んでいる。それに参加した者のなかには、自分をはぐくんできた西欧思想に別れを告げ、過去とのつながりを断ち切った者さえいる。

この集団が“透明の知性集団”である。この“たくらみ”つまり“アクエリアン革命”には、政治的な信念もなければ、世に向って訴えかける宣言もない。この“革命”に参加する者たちの力は分散されているが、各自の行動は具体性をおび、科学的でさえある。ただその思考方法はあまりにも世間の常識からかけ離れている。それを心得ている彼らはあまり口を開きたがらない。しかし、彼らの発する疑問、質問はまったく新しい角度から出されるもので、体制を内側から変えようとするものである。

この“アクエリアン革命”はいままででの社会改革よりも幅が広く、どの革命よりも底が深い。そして、人間の新しいあり方を求め、新しい文化を創り上げようとする。大きな地殻変動ともいべきこの変化は、政治体制や宗教、哲学を新しい形で生み出そうとするものではない。それは精神の新しいあり方であり、むしろいままででの科学上の大発見や、人類が積み重ねてきた英知を踏まえて成り立つものである。

収入、教育の格差を超えてさまざまな人々がこの“革命”に参加している。教師も、サラリーマンも、高名な科学者も、公務員も、国会議員も、芸術家も、億万長者、タクシーの運転手、医学の大家、教育、法律、心理学のエキスパートもいる。自分の考えを人前で堂々とのべる人もいるし、誤解されることを恐れて沈黙を守っている人もいる。

職場や家庭、教養のレベルに関係なく、“アクエリアン革命”に参加する者はすべて、その心のなかに目覚めた大きな変化ゆえに、結びつけられている。彼らはもろもろのしがらみを抜け出し、惰性や恐怖心を捨て、まったく新しい充足感を感じている。

そこには、水瓶座に象徴される自由な行動があり、豊かな人間関係が存在する。作業は効率的

になり、自信が生まれ、不安感にも適切に対処していけるようになる。厄介なことはむしろ立ち向うべき課題だ、と感じられるようになり、それがストレスの源というよりは、やり直しの機会にと転じる。弁解がましい受け身の姿勢や不安、苛立ち、焦燥は消え失せる。“アクエリアン革命”のなかですべてがよみがえってくる。」

一方、ジョン・ネイスビッツは、その著『メガトレンド』（竹村健一訳）の中で、アメリカ社会の今後を左右すると思われる10の巨大な潮流を産業構造の変化とライフスタイルの変化とを相關させ、次のように指摘する。

第1の潮流、それは情報化社会が「地球村」を築いているということ。（「村」とは、今後大都市へと発展するという展望を含ませていると考えられる）

第2の潮流は、ハイ・テック（High Tech）とハイ・タッチ（High touch）とが共存しているということ。

新技術が社会に導入される時には、いつでも、平衡をとり戻そうとする人間的反応があり、この「ハイ・タッチ」がないと技術は拒絶される。ここ30年ほど、この両者が共存して発達しており、コンピューターやヨガ人口の増加、医療におけるホスピス運動、掘り出し物を求めるショッピングの増加、民芸家具の人気、映画人口の増加などは、この現われであるという。

第3の潮流、それは地球的に考え、地方的に行動するようになってきたということ。

第4の潮流は、長期的発想に立った「転進」が出来るか否かが社会の様々な分野における明暗を分けているということ。

第5の潮流は、かつての中央集権的構造にかわり、分散化の波が政治、文化、産業を変化させ、一層強力でバランスのとれた多様な社会が築かれつつあるということ。

第6は、あらゆる階層に“自助”（自力本願）の波が広まっているということ。

第7は、政治や消費者運動、企業の経営などにおける全員参加式の草の根民主主義の広がりである。

第8は、個人と個人、集団と集団とが話し合いや情報、資源の分かち合いなどによって目的を実現しようとするようなネットワークが社会に根をおろしているという動きである。

いまや、三次元に拡張したネットワーク構造は、人間同士の力関係をタテ型からヨコ型に変えてしまっているようだ。

第9は、経済エネルギーの地域的大移動の動き。

第10は、生活のあらゆる面における「二者択一から多種選択」への価値観の変動。

アルビン・トフラーが「第3の波」というセンセーショナルな言葉で表現したこの時代の大変動を、ネイスビッツは、アメリカにおける未来予測のための潮流としてより具体的に簡潔に指摘している。

このネイスビッツの“メガトレンド”（10の傾向）が現われている社会に生きているのが“アクエリアン・ピープル”であり、彼等にとってはまたこの社会が故郷であり、革命の舞台ともなる。

ところで、ファガーソンのいう“たくらみ”を知る人々は、何を知り、そして何をしようとしているのか。

“アクエリアン革命”の真髄は、人間が自然のなかに溶け込むことにあるようだ。長い間分断された世界に閉じ込もっていた人が、“全体像をみるようにする”というように発想の枠組を変えることで、多くのことを知るようになり、同時に変化や未知の世界にも恐れがなくなつて、生きることが、豊かで意味あるように感じられ、変革と新しいものを創り出す能力に恵まれていることを自覚し、それを実現しようとするようになる。

この透明な知性に到るに、人は幾つかの魂の段階を登らねばならない。

その第1の段階は、旅の入口の発見である。もっとも「この入口はあとで振り返ってみてはじめて気がつく入口である。いままでの世界認識が振らいだり、大事なことだと思っていたものがそうではなかったことに気づいたとき、旅がはじまる²⁾」ようだ。入口をのぞいただけでその道に取りつかれて先へ進む人。先へ進んでも行き先を定められず、前進をためらうようになる人、変革の意識をもちながらも、自分の立場をうまく説明できなくて立ち止まる人もいる。

入口を進み入った人間が出合う第2の魂の段階は、求道であるという。「求道の第1歩は、いかに小さなものであれ、大いなる意義を見つけ出すことからはじまる。——中略——おもしろいことに、われわれはまず自分の範囲内で、つまり古い枠組のなかで変革を経験する。——略——他人はどうしているのか、自分のやり方ははたして“正しい”のか、進歩はあるのか、ということが気になる。自分は何かよいことを見逃しているのではないかと気になる。そして、いろいろと手法を変えてみたり、手本となる人間を変えてみたりする。——略——だんだん意識が明瞭になってくる。」あちこち迷ったあげく、やっと、極めつきの解決法なんてないことに気づく。真理を入手するのではなく、こうしている自分自身が、自分のすべてが真理そのものであることに気づく。

第3の段階、それは“統合”である。

「人は統合された真理のなかに生きるようになり、それぞれの自分の内面の“師”を信じるようになる。はじめは新しい考えと古い思考のあいだに対立が生じたり、混乱が生じたりもする。人々は、その混乱を、状況を変えることをせず、改良しようとする。つまり、変革ではなしに、まず改革を試みる。

仕事、対人関係、人生目標、価値観がこうした変化の波にもまれ、人は幸福と孤独の両極端をさまよう。しかし、しだいに同志を得、新しい満足感を味わい、新しい可能性が開けてくる。——略——規範の変化につれて、すべてが整理し直されたように、いままでバラバラにみえていたことがらが、新しい枠組のなかにはまりはじまる。直観が知性よりも先に走るのもこのころである。人は意欲的に実験をはじめ、旧式の考えから脱却しようとし、自分の思想に鋭さを加えようとする。

自分の意識の変化をもっとよく知ろうとして、いままでは振りむきもしなかったことに目を向けはじめめる者も出てくる。哲学、量子物理学、音楽、意味論、大脳の研究、心理学などが新たに興味の対象に加わる。こうした“科学者”は、時には哲学者になる。とてつもない世界が目前に開けて、ありとあらゆるものが気になるから」である。

第4の段階が“たくらみ”である。

「ここではじめて人は、いままで考えてきたところ以外にも精神的エネルギーの源があることを知る。新しい考え方の枠組、つまり規範は、自分だけでなく、他の人の生き方にも応用できることに気づく。自分の精神が立ち直り、変革することができるなら、そしてそのエネルギーが他の人にもあるのなら、何人かが寄り集まって協力すれば、社会までも立ち直らせ、変革することができる」と考え出し、今までのつまらない日常生活を祭りの場へと変えていく。

変革のなかの人間達は連帯する。「それはオープン・システムとして世界に向かって開かれており、逃避の場所ではなく、探求の場でもある。人と人との結びつきを、形ではなく内容でとらえるようになると、関係そのものが変わってくる。いままで考えられもしなかったような気持ちの流れ、同情心、充足感が人間関係のなかに感じられるようになる。」このことについて、マルチン・ブーバーの言をかりるなら

「ほんものの語り、ほんものの教え、ほんものの抱擁のなかでは……二人だけにおかる大

事なもの芽生える……。二人のあいだになにもものが生まれても、それは2つに分割はできない。そのなかには、探索が終わり、新しいものがはじまることを予感させるなにもものがある」

さて、このような人々の家族関係はどうであろうか。「変革のなかの人間関係と同じく、変革のなかの家族はオープン・システムである」という。このような家庭は、「多くの友人にとり囲まれ、すべてを受け入れ、家族は個人としての自主性を保ちながら、グループのなかで調和を保つ。そこでは役割が課せられるのではなく、人間であることが求められる。競争ではなく協力が、感情の抑圧ではなく気持の解放がある。そうしたなかで子供は自尊心を身につけて育っていく」ようになるという。

アメリカに広がっている、こうした“たくらみ”をもっている人々は、こうしてみると情報化社会が生んだ新しいタイプの人間—ハイテック時代におけるハイタッチの重要性に気づいた人々であり、ネイスピッツに指摘された、地球的感觉をもつ新しいライフスタイルで生きる人々で、新しいコミュニケーションを創っている人々でもある。

2. 演出素材としての人間の可能性

これまで1と2とで述べてきたことを総合すると、ここに新しい時代に生きる新しい人間の内面構造の類型が浮き出てくるように思われる。僭越ながら、それをここで描述してみよう。そのような人間とは、1口でいうとハイ・テックとハイ・タッチとを己れの祭壇を中心に複合的に統合した人間とは言えないだろうか。ところで、彼等の内面的複合は、何を目指していくのだろうか。このことを推察する際に、ファガソン女史の次の言が深い示唆を与えてくれる。

「われわれの文化は、シャイアン族の“知識の円環”を必要としている。それは、すべての情報と経験を合わせる世界観であり、地球上のわれわれの場所を説明し、進化と歴史のなかにあるわれわれの立場を物語る。かぎりなく小さなエレクトロンの世界と、膨大な天空の星座とのつながりを明らかにし、生誕と死と勤労と家族のなかの人間のあり方を示しもしてくれる。すべては前後左右の関連のなかにあり、全体のシステムに目を向けねば他人はもとより、自分自身をも理解できないということを教えてくれるのは、“知識は輪をなしている”という概念である。」

『エントロピーの法則』の著者、ジェレミー・リフキンの次の発言も意味深い。

「結局、科学者が学んだのは、あらゆる出来事は、それ自体が唯一無二の存在であるという点につきる。すなわち、ある出来事が発生すれば、その出来事は他の一切の出来事と区別される。こうした理由から、同じ現象は二度と起らないと言ってよい。しかも、その現象の起こる原因は、それに先だつ一連の条件だけによって決定されるのではなく、むしろ、迷路のごとき過去一切の現象の有機的な影響によって展開され、繰り広げられているのである。——略——この宇宙に存在するものは、すべて、あたかもクモの巣のように複雑功妙に絡み合っていて、他のあらゆるものと関連を持っている。——略——

これまでのニュートンのような考え方は、孤立した要素たる物質ないし固定したエネルギーの蓄積として、すべての現象を扱ってきたが、それが今、あらゆるものはダイナミック・フロー（宇宙全体の流れ）の一部をなしているという考え方に、道を譲っているのである。」

どうやら、人間の内面における複合は、宇宙全体の流れの方向に展開されていくのが本質的のように思われる。ところで、情報と経験とを具体的に結合するいろいろな試みがすでに始まっているようだ。

日本と同様、アメリカの大部分の州では、教育内容を法律で定めているにもかかわらず、従来

のような“左の脳”（過去を記憶し、それを現在の経験と比較し、分類する全体的で完結的な活動を）の活動を強化するプログラムだけではなく、“右の脳”（言葉の側面を理解し、感情の起伏をつかさどる）を活動させるプログラムを採り入れる新しい教育も進行しているらしい。「たとえば、音楽や体操や芸術と勉強を組み合わせるとか、歴史上の裁判を劇的に再現してみせて、関心をもたせるといったことが行なわれている。また昔ながらのお祭りや、手芸工芸を習いながら、歴史や地理の勉強をすることもある。数学を使ってドームが建設できることが教えられ、また地域社会全体が学びのキャンパスとなる。特別科目の授業には親や地元の“研究者”がやってきて授業をする。生徒が教壇に立つこともある。とくに芸術や人文系の学習が重視され、生徒は書道やろうけつ染めを習ったりもすれば、ブロードウェイの劇を上演したり、テレビの台本を書いて上演したりする。学校の役員会が市議会を見学して、政治を動かす力について実感を得たりもする。動物の世話をして生物を学び、庭いじりをして植物を学ぶ。

条件づけについても学習する。自らの行動様式を知るところを学び、自分の心の中の恐怖心や葛藤を見つけさせるようなクラスがもたれる。責任感を養い、自分の気持を人に伝えることを学ぶ。意識の変革ということも正面から取り上げられる。“知能を中央（大脳）の寄りにする”練習や、瞑想、緊張緩和、夢想などの手段を用いて直観力を養い、脳全体が機能するようにしむけられる。さらに、呼吸、緊張緩和、ヨガ、バイオフィードバックなどを通じて、身体に対する感覚に目覚めるように訓練される。」など。

このような教育が“知識の円環”を形成するような方向でとり組まれるなら、それは新しい時代をリードする教育になっていくにちがいない。

ところで、前述したように、生徒の内的現実（気質や性格、思考や情緒の流れなど）に根ざして、その可能性を拓くために世界の諸物体、諸現象を総動員して意図的世界を創造するような教師の作業は、いわば演劇における「演出」の仕事に似ている。

演出とは、「演劇の生態である。諸芸術はそれぞれに独自の表現方法をもっているが故に、互いに分別されるのだが、演劇は『演出』という表現方法をもって、諸芸術から独立する。文芸は観念的に言葉を語るだけ、美術は空間的に形づくるだけ、音楽は時間的に踊るだけなのに、演劇は観念と空間と時間とを総合的に、つまり世界を完全に具体的に演出する。演出は単なる物まねではない。思想や、感覚や、言葉や、意匠や、形態や色彩や、身振や、リズムや、メロディや、その他あらゆる有機無機の物質を形成して、それに生命を吹きこむ作用が演出である。およそ森羅万象、何一つとして演出の素材たり、対象たり得ないものはない。人間を、電気を、器械を用いるのは言うまでもない。猛獣の叫声や、あれ狂う風雨や、大海の怒濤などさえも、ついにラジオや映画によって捕えられ演出の素材となった。演出とは何よりも現前の観衆のために、演劇的世界を創造して、彼らをそこに我にもあらで没頭せしめる作用である。演出は、しかし、呪術師の気まぐれな魔術とは事かわり、一定の劇的理念にもとづいて、戯曲的過程を合理的に表現するものでなければならない。従って演出には、演出者がなければならず、また様式の定立がなければならぬ」という飯塚友一郎の定義づけがあるが、また簡潔に、見る者（観客）に「ある刺激または影響を効果的に与えるために、その物語を、俳優の中に、そしてまた舞台の上に、具体化しようとする全過程が演出という仕事である」という倉橋健の定義づけがある。教師がこのような演出家としての自覚をもって創造の仕事をするべきことの必要性は、これからさらに増していくように思われる。

倉橋は、演出のやり方にも2通りの相反する考え方があるという。

その1つは、演劇を創造するのは演出家であるという考え方で、「演出家こそ演劇の真の創造者であり、そのため演出家は絶対的な独裁者でなければならず、俳優はあらゆる点で演出家の考

えを実現するところの素材にすぎない」というもの。

これに対して、「俳優こそ演劇の主人公であり、創造者なのだ——観客は俳優の個性をとおし劇を見、感じるのであって、演出家の主要な仕事は、俳優の創造の場をととのえ、彼の脚本や人物に対する理解を助け、それによって俳優が自己を表現するのを援助することだ——演出家は単に稽古の管理者にすぎず、本質的な形象化の問題は俳優の個人的な自由⁷に任されます。したがってここでは、演出家が俳優に立ち入った助言⁷をすることが少なければ少ないほど、よいということになり、演出者の役目は舞台上の交通整理にとどまる」という考え方である。

だが、実際の演劇では、俳優は演出家の素材であると考えている演出家でも俳優の創造性は否定できないし、俳優が演劇の創造者であるという意見をもつ演出家でも、俳優に対して演技上の指示を与える必要もでてくるとというのが真理である。これを意識的に積極的に押し進めた新しい演出法も出てきている。

1960年代後半に始まった『小劇場演劇』はそのような性格を典型的にもっている。この流れをひく劇団が80年代までに数多く出てきたが、思想や、演出法、などそれぞれが個性をもっているが、基本姿勢、つまり、既成の演劇のあり方を否認し、人間と世界を全体的に重層的にとらえ直そうとする試行錯誤をとり続けている点においては、共通した基盤をもっているようだ。

これらの演劇においては、「1種の文学作品として劇作家から提供され、演出家と俳優がその思想と主題を正確に舞台に反映するといった新劇的な戯曲のあり方ではなく、集団が共有する感情と志向を基盤とし、個々の俳優たちの身体に担われることで初めて本当の意味をおびる戯曲の姿」が一般的にみられるようである。そのような演劇は、当然のこととして、一回性として眼前する舞台となり、劇作家は集団の外に独立して存在するのではなく、集団のリーダーが劇作家と演出家を兼ねる例が主流になってくる⁸。

一方、演出される側の俳優にも、演出の過程で、自己の内面に心理的闘いが生じてくる。普通、俳優は舞台上で2つの異った心理的体験をするようだ。このことについて倉橋は、

「1つは、役の人物の生活にそつての体験であり、もう1つは芸術家として人間としての俳優自身の生活の線にそつての体験です。第1の過程は、観客の見ている前で舞台にいるということと関連する俳優自身の思考や感情の問題です。この2つの過程は、たがいに作用しながら、最後においては統一的な、複合された体験をかたちづくり、役の人物としての俳優の生活と、創造者としての俳優の生活がとけ合い、どこで一方が終り一方が始まるのか見分けることが困難なほどになります。——略——もしこの種の融合が完全に実現すれば、俳優の心理のなかには創造の喜びや満足は生まれてこず、俳優はまったく役の感情のとりこになってしまい、舞台で実際に自殺をしたり、相手を傷つけたり殺したりしかねません。

創造の喜びがともなわない芸術というものは存在しません。したがって俳優は、自分の役の生活に生きながらも、決して役の人物のなかに溶け込んでしまつて本来の自己を失つてはならないのです。」という意味深い言葉を発している。俳優が矛盾する思考、感情を融合させる時に、必然的に創造が生まれるという。

ここに人間の可能性を拓く演出の方向があるといえる。俳優が過去や、1つのイメージなどにこだわらずに、さりとて演出家の期待にも妥協せず、己れの内的呼び声に耳をすませて自己を広げようと努力し、闘う時、新しい世界が拓かれていく。

このような演出家と俳優との関係が意識的に教育にとり込まれ、全地球的感觉であらゆる分野が多次元的にダイナミックに(芸術的に)ぶつかり合う関係が生起した時、新しい時代にふさわしいコミュニケーションが拡大していくことになる。

3. 教育の演出の展望

ここでは1と2、でふれてきたことを教育（広義の）の展望とからみ合わせて考察することにする。

教育における演出家たる教師は、まずは時代の本質をとらえる作業にとりかからねばならないようだ。

まずは、地球的宇宙的感覚で情報を体験的にキャッチすることが必要だ。情報が知識としてではなく、いわゆるシャイアの輪を形成する、あるいは形成することを自覚することが求められる。もしも、経験を通して自分の内的世界に広大な融合と創造の世界が広がった時、その満足感はずいぶん大きな愛となって必然的に他者へも及んでいくことになる。彼は、いわゆる“たくらむ”人たちの仲間入りをするわけだ。

次に、彼は他者の中にも人間としての深い喜びと生の自覚とが広がることを信頼し、“たくらむ”仕事にとりかかる。未来に向かう時代に対する認識が深ければ深いほど、その演出は科学と芸術との創造的統合の世界となるだろう。

さて、彼はかつて自分が体験したように、もしも他者が古い枠組に縛られ、固定した世界にいることに気づくと、彼は、相手の世界に新しい波紋を生ずるようにとの意図をもって小石を投ずるだろう。もちろん、相手の世界の枠組が硬ければそれだけに小石の選び方や、投げ方(演出法)について熟慮する必要がでてくる。

さて、内的に投げられた小石(情報)は、次第に生徒の内部に波紋を広げはじめ。混乱が始まり、嵐のような魂の迷いの渦が逆巻いてくる。渦の激しさに耐えながら、それを静める方策はないものかとあちらこちらと徘徊する。そのうち内的に対立していた思考、感情の間に、自分なりの統合が生じてくる。

演出家(教師)と俳優(生徒)とが葛藤のはてにたどりついた新しい世界であるこの統合は新しいコミュニケーションの世界でもある。しかし、当然のこととして、演出家のたどりついた世界と俳優の世界とは、当然のことながら共有する部分(統合した世界の部分)はあっても、それぞれの創り出した世界は同一ではない。この変化、発展は、ニュートン力学的に平板にはなく、エントロピーの世界に支配されたような有機的に進んでいく。

教育が科学と芸術の複合的、多次元の統合の世界として知識の輪を形成する方向に演出されていくことは、マクルーハンの言う「電子回路が西洋を東洋化している。自己完結的で、自らと他をきびしく区別し、分析にたけた西洋の思想は変わりつつある。いまや、外に向かつて開かれ、他者と融合し、調和して流れる、という東洋的な考えが西洋に入りつつある」という言葉の実態が形相されていくということでもあろう。

<参考・引用文献>

- 1) アルビン・トフラー著 徳山二郎他訳、「第三の波」、日本放送出版協会、1981
- 2) マリリン・ファースン著 松尾式之訳 堺屋太一監訳、「アクエリアン革命」、実業の日本社、1981
- 3) 高橋巖著、「神秘学講義」、角川書店、1980
- 4) ジョン・ネイスビッツ著 竹村健一訳、「メガトレンド」、三笠書房、1983
- 5) ジェレミー・リフキン著 竹内均訳、「エントロピーの法則」、祥伝社、1983
- 6) 飯塚友一郎著、「増訂 演劇学序説」上下巻、雄山閣、1974
- 7) 倉橋健著、「演出のしかた」、晩成書房、1981
- 8) 扇田昭彦編、「劇的ルネッサンス」、リブレポート、1983